

富岡鐵齋筆「酒望子図并酒徳頌」考

A study on “Sakabousizu and Shutokunosyou” drawn and written by Tomioka Tessai

服部 一 啓

HATTORI kazutaka

(美術教育講座)

(平成二十五年九月三十日受理)

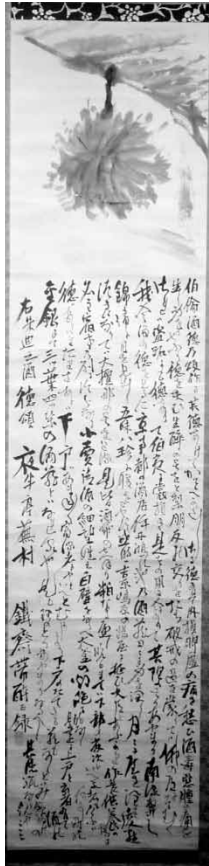
一 酒望子図并酒徳頌

『鉄斎研究』第四四号に《酒徳頌》(紙本水墨 掛幅 一三四・三×三二・九cm)と題する六十二歳筆の作品が掲載されている。紙本半切の上部には、軒先に吊られた杉玉(酒望子・酒林)を斜方から描き、全体の四分の三以上を長文の賛が占める。款記に「右朱廸之酒徳頌。蕪村翁の作なるを。鐵齋醉民臨。」とみえ、酒徳頌を画題とし蕪村画に倣ったことがわかる。この《酒徳頌》『鉄斎研究』所収と同時期の制作と考えられる、《酒望子図并酒徳頌》と題する作品が遺されている。作品は紙本半切(一三四・五×三三・四cm)の掛幅。薄墨の階調による簡潔な色使いで、省筆ながらも杉玉が印象深い。款記に「右朱廸之酒徳頌。夜半亭蕪村。鐵齋帶醉而録。」とあることから、賛文は江戸中期の俳文集『風俗文選』を典拠とする「酒徳頌」を録したものと考えられる。

さて、ここでは《酒望子図并酒徳頌》を手掛かりに、『鉄斎研究』《酒

徳頌》作品との異同等を端緒とし、①作品内容の確認と同一画題作の検証、②落款「醉」の検討、③「酒・醉」に関わる作品検討、④「醉」落款作品の用例一覧及び考察、以上のような観点で鐵齋筆をみていく。

《酒望子図并酒徳頌》



1 伯倫酒徳乃頌作る。其徳あけてかそへ可多し。佐る徳有て内損脾虚の病を愁ひ酒毒患腫の痛を

2 生し身をやふり徳を失ひ生酔の号をと梨朋友能交りをたち破戒の過

を蒙りて八佛の道尔そむく。

3 佐連八盗跖^{されは}も徳ありて伯夷^に裳損有はその用る人^によりて其理のとりあやまり南流弊^{なるへし}之。

4 我今酒の徳を見るに京南都の酒店伊丹鴻能池^の乃酒蔵日々尔身^にを潤し月々尔屋^にを潤春。綾羅

5 錦繡尔目^にを見出し五味八珍尔腹^にをこや須。或時八吉原嶋原の揚屋尔遊び大臣とあふ可連作善供養^にの場尔

6 徒良奈りて八大檀那の号をと流。是皆酒袋の志保^{しほ}り粕なる遍^へし。昨日まで八下部の藤次といへ累者も公ふ八なに可し町能^の

7 名主宿老乃列尔徒^の奈り小賣請酒の細望姓も白壁を奈^ならへ大釜の烟絶る時奈し。是世上尔上戸と云者有て酒能^の

8 徳八あら八連た里。さあら八下戸八あま年く富流者^に尔やといへとむ可しより下戸のたて多る蔵も奈しと八み(な)飲ぬけの

9 金銀^にて三ツ葉四ツ葉の酒蔵と八奈連累也。是も理のとりあやまり奈るへし。其徳孤奈らんや・・・・

10 (款記) 右。朱廸之酒徳頌。夜半亭蕪村 鐵齋帶醉而録。

印章 白・朱文 「百鍊・無倦」方連印(小沢萩處刻)『鉄斎研究』七三

【二〇】

白文 「百鍊」。本名。金属を何回となく鍛えること。

朱文 「無倦」。字。たゆまず努力すること。

*両面印で、捺印面は下駄印の体裁。裏面は白文「鍊崖仙史」(佐藤硯斎刻)。

出典『本朝文選』(『風俗文選』)卷十・頌類・酒徳頌・朱廸

江戸中期の俳文集。十卷十冊。森川許六編。宝永三年(一七〇六)

刊。刊行直後に支考らの意見で『風俗文選』と改題して再版。松尾芭

蕉および蕉門俳人二十八人の俳文百十六編を集め、分類編集し、作者列伝を加えたもの。

釈読

伯倫^①酒徳の頌^{しょう}作る、其徳あげてかぞへがたし。さる徳有て内損脾虚の病を愁ひ、酒毒悪腫の痛を生じ、身をやぶり、徳を失ひ、生酔の号をとり、朋友の交りをたち、破戒の過^{とが}を蒙りては、佛の道にそむく。されば盗跖にも徳ありて、伯夷にも損有、はその用る人によりて、其理のとりあやまりなるべし。我今酒の徳を見るに、京南都の酒店、伊丹鴻能池の酒蔵、日々に身を潤し、月々に屋^{おく}を潤す。綾羅錦繡に目を見出し、五味八珍に腹をこやす。或時は吉原嶋原の揚屋に遊び、大臣とあふがれ作善供養^{さぜんくよう}の場につらなりては、大檀那の号をとる、是皆酒袋のしほり粕なるべし。昨日までは下部の藤次といへる者も、けふはなにがし町の名主、宿老の列につらなり、小賣請酒^{こうりけざけ}の細望姓^{ほぞむとせ}も、白壁をならべ、大釜の烟^{けむり}絶る時なし。是世上に上戸と云者有て、酒の徳はあらはれたり。さあらば下戸はあまねく富る者^{とめ}にやといへど、むかしより下戸^⑥のたてたる蔵もなしとは、み(な)飲ぬけの金銀にて、三ツ葉四ツ葉の酒蔵とはなる也、是も理のとりあやまりなるべし。其徳孤^⑦ならんや・・・・。

右。朱廸之酒徳頌。夜半亭蕪村。鐵齋、酔を帯びて録す。

(参考)『鉄斎研究』四四―九「酒徳頌」(鉄斎研究所 昭和五十四年七月)

① 劉伶、西晋の思想家、江蘇沛の人。竹林の七賢の一人。「酒徳頌」を作る。(『文選』卷四十七 劉伶「酒徳頌」)

② 徳川時代の伊丹酒は、近衛家の庇護の下、醸造業が盛大に行われ

た。慶長五年（一六〇〇）に鴻池善右衛門が、室町時代からの段仕込みを改良し、三段仕込みとして清酒を大量生産する製法を開発。酒家の主人は、花車豪宕な生活の中、風流を解するものが極めて多く俳諧を嗜んだ。（岡田利兵衛『上方』四号・一九二九年「徳川中葉の伊丹酒」伊丹酒造組合参照）

③ 『大學』伝六章、「富潤屋、徳潤身」による。

④ 鉄齋は島原の太夫吉野に関して「吉野草紙の一節」という文を京都美術協会雑誌第五号に発表。作品に〈吉野乃面影圖〉清荒神清澄寺蔵・八十六歳（『鉄齋研究』第三二二五）がある。

⑤ 『俳諧炭俵集』（江戸中期の俳諧集。二冊。志太野坡・小泉孤屋・池田利牛共編。元禄七年（一六九四）刊。俳諧七部集の第六集。）上巻、野坡の句に「奈良がよひおなじつらなる細基手」とみえる。「細基手」は零細資本の商売のこと。

⑥ 酒飲みが建てた蔵はあっても、飲まない者が建てた蔵はない。酒代を節約したからといって裕福になるとはかぎらないという。

⑦ 『論語』里仁篇第四（二五）に「子曰。徳不孤。必有鄰。」とある。※画中の杉玉（酒望子・酒林）杉の葉の穂先を球状にたばねたもの。造り酒屋の軒先に大杉玉を吊るした図。新酒の搾り始めと熟成具合を知らせる。もとは酒の神様に感謝を奉げる意。

『鉄齋研究』『酒徳頌』と『酒望子図并酒徳頌』との異同と考察

『鉄齋研究』『酒徳頌』

1行 酒徳の頌……………

徳阿りて……………

2行 号をとりて朋友の交……………

『酒望子図并酒徳頌』

酒徳乃頌

徳有て

号をと梨朋友能公理

蒙りて佛の道尔楚むく……………

3行 徳有て伯夷尔も……………

奈る弊し……………

4行 見累に……………

鴻の池の……………

6行 徒羅奈りて八……………

是み奈酒袋の志保り粕なるべし……………

下部藤次といへるものも……………

下部の藤次といへるものも……………

7行 何かし町の……………

※小賣清酒の細金姓も……………

※出典『風俗文選』巻十・頌類・酒徳頌には、「小賣清酒の細望姓（ほそもとで）」とあり、《酒望子図并酒徳頌》は草書「請」、行書「望」と認められる。

白壁を並へ大釜能烟……………

白壁を奈らへ大釜の烟

是世上二（8行）上戸といふ者……………

是世上上戸と云者

8行 徳八あら八連たり……………

富る毛のにや……………

9行 立た累倉も奈しと八み奈……………

奈連る南り是も又理乃（10行）…9行 奈連累也是も理の

款記 蕪村翁の作奈るを……………

鐵齋醉民臨……………

鐵齋帶醉而録

夜半亭蕪村

鐵齋帶醉而録

《酒徳頌》（『鉄斎研究』四四—九《酒徳頌》より転載）



本作《酒望子図并酒徳頌》の画の構図及び賛の構成は、『鉄斎研究』所収の《酒徳頌》（以下《酒徳頌》）とほぼ同様とみてよい。杉玉（酒望子）を描いた図に『風俗文選』中の「酒徳頌」全文を録したものである。行数は《酒徳頌》の十行に対し、九行にまとめている。ただし四行目までは同じで、五行目の行脚、《酒徳頌》は「作善供養の」「の」字を左に添えているのに対して、「作善供養の」として「場尔」を左に添えている。行における差異はこの時点から認められる。全体感に照応すれば明解に異なる違いではない。

漢字仮名交じりで書かれた賛は、書き誌すことを自らの愉しみにしたのであろう。紙面いっばいに埋められた文字は賑やかで愉悅な雰囲気である。筆の穂にたつぷりと墨を含ませ、息長く文章を唱えるように、潤から渴へ軽快に文字が紙面を走る。縦への流れと振幅動きのある行に妙趣を感じる。さらに墨継ぎのアクセントが効果的で、画の杉玉の墨溜まりや軒のかすれの筆致とよく呼応して、作品全体の遠勢を生んでいる。

共箱には、箱蓋〈表〉酒望子図并酒徳頌

〈裏〉明治卅季六月臨謝蕪村筆 鐵齋外史



とみえ、《酒徳頌》と同じく明治三十年六月の作であることがわかる。箱蓋表を比べると、《酒徳頌》は金冬心の影響などが垣間見える隷書を主とした雑体書である。横画は筆圧をかけて太く、縦画は筆を吊りあげている。《酒望子図并酒徳頌》は行書で書かれ、文字の大小の起伏が大きい。蓋裏はその筆意など共に似通っており、懸隔はない。「明治卅季六月」部分の着意（賛の四行目「月」字の字形、書きぶりにも対比が看取できる。）や「鐵齋外史」部分の即応した収め方に彼の機微が窺える。

《杉酒屋画賛》（『蕪村・一茶その周辺』より転載）



さて、本図の典拠となる蕪村筆については、大磯義雄著『蕪村・一茶その周辺』（八木書店）「蕪村―酒仙―」の項に、鉄斎が写した蕪村の原画と同じ図様の「杉酒屋画賛」が掲載されている。半切で軒端に吊るした酒望子を描き、賛文は九行にわたり、款記に「右。朱廸之酒徳頌。応斗禄斎需。夜半翁醉中漫書。」とみえる。

ここで制作について、正宗得三郎氏「鐵齋翁の思い出」(『鐵齋』平凡社)、小高根太郎氏「晩年の日常生活」(『富岡鉄齋』吉川弘文館)、富岡益太郎氏「祖父鐵齋の思い出」(『鐵齋大成』第二巻)の興味深い一文を引用する。

・同じ画題のものを異なった構図で、一度に二枚描き始められる時がある。——中略——絹の時は、二、三枚一処に列べて彩色されるそうだ。

(正宗氏)

・同時に二つか三つの絵に着手することはあっても、せわしく次から次に描いていくというようなこともなかったのである。(小高根氏)
・画ができると賛を書くのですが、字数の多いものになるとなかなか大変です。書物を傍らに置いて、長い詩や文章を写すのに息をつめて一心に書いているところを見ると、画を描くより苦勞しているほどに思えました。

(富岡益太郎氏)

同時に二、三作の着手を示す記述や長文の賛に取り組む様が記される。ところで鐵齋には同一の画題や類作の作例は珍しくない。その制作年代にも非常に幅があり、数多くの同一画題作や類作が遺されている。柏木知子氏は、論稿の中で〈大國大神神影〉・〈壽老像〉を挙げて同じ画題を続けて描くことに言及している(『木村定三コレクションにおける富岡鉄齋作品の特質』「富岡鉄齋の見た寿蘇会」)。繰り返し描き続けた画題「富士山」については、傑作〈富士山図屏風〉清荒神清澄寺蔵を頂点とする多くの作品が現存し、笠嶋忠幸氏など先学の識者が緻密な検証を示している。また、「蓬萊仙境」「神仙」「蘇東坡」の故事をテーマとする作品群は、鐵齋の代名詞であり、名作が多い。

鐵齋は、蕪村の画を真摯に学んでいる。「十便十宜図」にいたっては

実見する機会を得て、観る毎に模写し楽しんだという(『十便十宜圖帖』箱書『鉄齋研究』二二—一二)。布施美術館所蔵作品はその一つである。〈武陵桃源圖〉(『鉄齋研究』四一—六)には、原本は六波羅蜜寺にある董其昌の幅であり、それを蕪村が毎日見に行った逸事が記される。〈寒山拾得圖〉対幅(『鉄齋研究』一四—一一)にも、かつて観た蕪村画に倣い寒山拾得に擬する意と認めている。《酒徳頌》・《酒望子図并酒徳頌》の作例は特別なことではなく、むしろこれらの蕪村尊重の延長線上に連なるものである。実証を重んじる彼は敬慕する蕪村研究に余念なく、伊丹の酒蔵や島原の文化人サロン、劉伶・酒徳頌などの対象にも典籍を繙き、徹底的に考証したことは想像に難くない。

《酒帘図并蕪村俳文》・《酒望子図》

これまでの調査で「朱廸之酒徳頌」を賛とする作例はもう二作《酒帘図并蕪村俳文》・《酒望子図》が確認され、四作を数える。この二作は、《酒徳頌》・《酒望子図并酒徳頌》とほぼ同様の形態である。

一つは、鉄齋美術館「印癖を娛しむⅣ」展に出陳された《酒帘図并蕪村俳文》(148.0×40.3cm)である。款記に「大正四年八月一日 爲西宮賣酒隱士囑 八峯鐵齋外史移寫」とみえ、八十歳の筆になる。爲書きから推し測るに鐵齋と依頼者である西宮賣酒隱士の間には細やかな情交があったであろう。西宮賣酒隱士はこの作を頂戴した感激とそこから汲み取る鑑戒・教化に鐵齋翁への信をさらに篤くしたに相違ない。落款印には桑名鐵城刻の白文「鍊道人」(『鉄齋研究』七三—【三六五】)、自鐫の「流水今日名月前身」(『鉄齋研究』七三—【二八九】)印が捺されている。

前掲作品とほぼ同様の形態とはいえ、八十歳の手になるこの作は、文

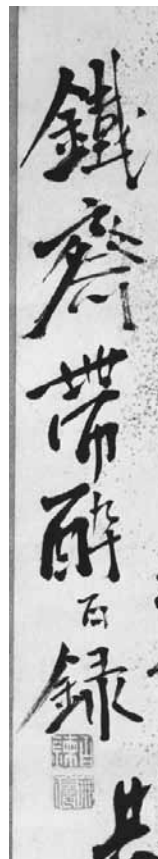
字の沈潜の度合いを増し、書きぶりも漢字と仮名の調和がいよいよ自然となつてゐる。文字を具にみていくと楷書・行草書、そして四行目に「樂」「身」「屋」「羅」といった篆隸書の筆意と形を持ち込みながら自在に書き進めている。金石の気溢れる書の世界を志向した鉄斎の書の特質が表出されている。さらに二行目「儺」の字は、人偏に西國、仏を表し、高芙蓉が用いたといわれる奇字である。敬慕する文人高芙蓉に思いを馳せる鉄斎が好んで用いた。『掃心圖畫』所載の〈東坡謁佛印圖〉八十五歳・清荒神清澄寺藏、歌人で国文学者の佐佐木信綱に宛てた〈佐佐木信綱宛書簡〉八十八歳・日本近代文学館藏（『鐵齋尺牘』求龍堂）などに認められる。賛全体を比すと、『酒徳頌』・『酒望子図并酒徳頌』《酒望子図》は行の振幅・流れが印象に残る斜形の感が強い。《酒帘図并蕪村俳文》は行の上下がはつきりと通りながらも十行が一体化し密着感を強め、各行に各々目を惹く大ぶりの漢字を配している。若い頃は篆刻家を志し「余に印癖あり」と自負するほど、印にまつわる逸話を題材にし、用印に関する款記も多い。この作は印学を広く涉獵し、印を心底楽しんだ印癖をも反映した雅味深いものとなつてゐる。

《酒望子図》と題する作は、賛文が十行である。文字に多少の移動はあるものの《酒徳頌》・《酒望子図并酒徳頌》との書きぶりに近い。起筆や筆圧を強調し、左上方に重心を置いた文字の結構が多いながら、穂先を利かせて明確な点画をつくり下方へと流れていく。款記に「右。朱廸之酒徳頌。夜半翁蕪村。鐵齋醉録。」と記し、『酒望子図并酒徳頌』と比して、夜半亭が夜半翁に、鐵齋帶醉而録が鐵齋醉録と異同がみられる。印は《酒徳頌》と同じ桑名鐵城刻の両面印、白文「富岡百鍊」朱文「鐵塞翁」（『鐵齋研究』七三―【一一二】【一一三】）と見受けられる。

落款「鐵齋帶醉而録」からの検討

まず、本作《酒望子図并酒徳頌》落款「鐵齋帶醉而録」を「帶醉」に関する落款事例を挙げながらみていく。

《酒望子図并酒徳頌》落款部分



鐵齋帶醉而録……鐵齋、醉を帶びて録す。

《酒望子図并酒徳頌》明治三十年 六十二歳

「醉を帶びて」に着目すると、

① 号（鐵齋・鐵齋外史）＋② 状況（帶醉）の形態として次の例があり、

《醉李白像》 鐵齋帶醉而墨戲（六十歳代）『鐵齋研究』四二―九

《群僊祝壽圖》 鐵齋外史帶醉而（六十歳代）『鐵齋研究』一三―五

② 状況（帶醉而寫）＋① 号（鐵齋外史）の形態として

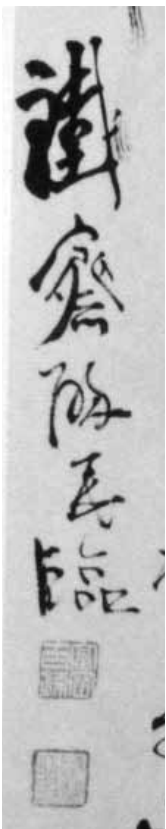
《佛說摩訶酒佛妙樂經》帶醉而寫鐵齋外史。

（六十三歳）『鐵齋研究』一〇―六

などの用例が確認できる。

次に『鐵齋研究』『酒徳頌』をみていく。

《酒徳頌》落款部分（『鐵齋研究』第四四号より転載）



鐵齋醉民臨：鐵齋醉民臨す。

《酒徳頌》明治三十年 六十二歳

鐵齋自身が酔いの境地にある意。民の使用例としては、頑なにして命に従わざる意の「頑民」、開拓していくとの意を表す「魁民」などがある。「臨」は通常臨摸に用いるが、鐵齋の用い方はやや範疇が広いといえよう。たとえば〈仿蘇子壽老人圖〉八十六歳〔《鉄斎研究》一二—一七〕款記には「壽蘇会翌日。用蟬葉硯臨之」とあり、壽蘇会の開かれた翌日に蘇東坡遺愛の硯を用いて「東坡筆壽老像拓本」に拠って制作したものである。（壽蘇会については『鉄斎研究』七二号、『書論』三九号柏木氏の論稿参照。）鐵齋は款記や箱書に臨・仿・寫・擬として、典拠となる図案を引用したことを明記していた。「摹古」、「仿其法」、「倣」、「撫筆意」、「擬意」、「臨写」、「背臨并誌」などがその例である。

さて、《酒望子図并酒徳頌》・《酒徳頌》款記からは、描かれた画題、賛文の内容に即して「酔」落款が使用されたことは明白である。また、〈佛説摩訶酒佛妙樂經〉六十三歳・清荒神清澄寺藏〔《鉄斎研究》一〇—六〕も同様と考えるのが自然であろう。亀田鵬齋の訳による仏説摩訶酒仏妙樂經が六十三歳時に楷書細字で書かれ、巻末の跋文は八十二歳の筆で行書である。あきらかに丹念な金冬心風の楷書体であるが、落款部の「帶醉而寫鐵齋外史」の書きぶりに差異が認められる。〈群僊祝壽圖〉・六十歳代〔《鉄斎研究》一三—一五〕は充分な準備のもとに描かれた作品にみえる。壽老人をどっしり座らせ群像を巧みに描いた図で、賛に『詩経』豳風・七月を採り「爲此春酒以介眉壽」とある。十月に稲を刈って酒を仕込み、春になって酒が熟成する。その酒を眉の長い長寿の老人たちに飲ませて元氣をつけさせる意である。落款には「鐵齋外史帶醉而寫」とみえる。

六十歳代には多様な「酔」款記の書きぶりがある。画題、賛文の内容

に合わせながらも〈醉李白像〉布施美術館藏〔《鉄斎研究》四二—一九〕は揮毫の場の雰囲気によって即興的に優品が生まれたのであろう。詩仙李白が酒に酔い仙境に眠る様を描いた作である。画賛は、杜甫の飲中八仙歌の句「臣是酒中僊」を豪快に行草書で大書し、款もまた「鐵齋帶醉而墨戲。」と草書で自在な書きぶりが看守できる。酔った李白の姿をかきた鉄斎の自画像と青木勝三氏〔《文人書譜 鉄斎》〕は指摘する。

二「酒・酔」に関わる作品検討

『鉄斎研究』を捲ると、第一号四〈日本繪圖・清荒神清澄寺藏〉の画賛にみえる「肝膽相澆一壺酒」を筆頭に、第七二号一〇〈蓬萊僊境圖・清荒神清澄寺藏〉の画賛「自是蓬壺天不老、瓊桃花底醉長春」まで、鐵齋作品にはじつに「酒」「酔」に関する記述や語句がみられ、内容を読み解けばさらに膨らんでいく。

「酒・酔」に関わる作品を少し抽出すると

1、画題に冠するもの、

〈蝦夷人酒宴圖〉

五十歳代『鉄斎研究』六五—五

〈醉李白像〉

六十歳代『鉄斎研究』四二—九

〈佛説摩訶酒佛妙樂經〉鵬齋訳

明治三十一年 六十三歳『鉄斎研究』一〇—六

〈醉鍾馗圖〉冬心先生雜畫題記

明治三十三年 六十五歳『鉄斎研究』三四—八

〈踏雪沽酒図〉

八十歳頃『鉄斎研究』三九—一九

〈醉郷快樂圖〉

大正五年 八十一歳『鉄斎研究』六三—一〇

〈獲魚換酒圖〉

大正九年 八十五歳『鉄斎研究』六二—二一

〈漁夫快醉圖〉

大正九年 八十五歳『鉄斎研究』五五—一九

〈漁父會飲圖〉 蘇東坡詩 大正十一年 八十七歳『鉄斎研究』六七—一五
 〈得意醉臥圖〉 蘇東坡詩 大正十二年 八十八歳『鉄斎研究』五四—二六
 〈壽老歡醉圖〉 詩經 大正十二年 八十八歳『鉄斎研究』四—二五
 2、出典に依拠するもの、

〈山水圖屏風〉 朱熹詩 明治三十七年 六十九歳『鉄斎研究』一七—一〇
 〈大江捕漁圖〉 唐寅詩 大正五年 八十一歳『鉄斎研究』二四—一四
 〈草聖圖〉 懷素詩 大正七年 八十三歳『鉄斎研究』六四—二一
 〈漁隱清忙圖〉 李節詩 大正九年 八十五歳『鉄斎研究』三四—一九
 〈瓢中別天地圖〉 僊佛奇踪卷二 大正十三年 八十九歳『鉄斎研究』六三—二六

3、画題内容に包含するもの、

〈陽羨茗壺圖〉 明治三年 三十五歳『鉄斎研究』四〇—一
 〈胸中小天地圖〉 自作詩 明治九年 四十一歳『鉄斎研究』四〇—二
 〈潤州丁卯橋圖〉 自作詩 明治四十年 七十二歳『鉄斎研究』一七—一三
 〈漁樵對問圖〉 大正七年 八十三歳『鉄斎研究』一三—一
 〈壽老人圖〉 大正十三年 八十九歳『鉄斎研究』一九—二四
 〈家園安臥圖〉 大正十三年 八十九歳『鉄斎研究』一三—二〇
 〈華之世界圖〉 自作詩 大正三年 七十九歳『鉄斎研究』一一—二三
 などにおよそ大別できる。

画題に冠しなくとも作品内容に包含し、さらに出典に依拠するなど、「儂の画を観るなら、先ず賛を読んでくれ」「いわれの画は描かぬ」と鐵齋が言い続け、賛に意を注いだことが首肯できる。〈漁隱清忙圖〉八十五歳・清荒神清澄寺蔵は、金の李節・漁父詩を引きつつ『楚辞』卷之七・漁父の「世を挙げて皆濁り、我独り清めり。衆人皆醉ひ、我独り醒めたり。」などを念頭に置く。世間を隱居し、漁夫の生活に入り、余

生を送る。愉しみは仙人に通じるといふ含みを持つなど、画題、賛と画、出典が重奏的に絡みあう。若書きの〈陽羨茗壺圖〉三十五歳・出光美術館蔵は、煎茶への嗜好が一入でない癖好を物語るもので、明末宜興の泥壺名手と茶器を描いた卷子である。冒頭に「清茶亦醉人。鐵齋外史重題。」という扁額様の題を置き、「酒は人を酔わせるが、茶もやはり人を酔わせる。」意である。一方で最晩年〈壽老人圖〉八十九歳〔鉄斎研究〕一九—二四〕には、

八十九年また新に遇ふ。孫兒酒を侑^すめて咲聲^{しき}頻りなり。猶能く筆を揮つて遊戲を爲す。寫き得たり南山の壽老神。 鐵齋外史。

〔箱蓋裏〕 大正甲子歳六月甲子日。 鐵齋外史時年八十有九。とあり、新年を迎えごく日常の身辺、平穩な幸福を心から喜び、大吉とされる甲子機縁の日を選び箱書を施している。このような心持ちも鐵齋の側面である。

「醉」落款作品の用例及び考察

次に、落款に記された「醉」関連を挙げると、〔別紙〕〔資料—1・2〕の例が見いだせた。また〔別紙〕〔資料—1・2〕中で用いられた印を抽出したものが〔別紙〕〔資料—3〕である。資料3からは当時の印人達、清人、自刻、故人となった文人墨客の印などの使用がわかり、『鉄斎研究』第七三号所載の三八五顆以外の使用印も認められる。

鐵齋の書画における落款からは、制作の年代や画題の題材・考証をはじめ、制作時の心境なども読み取ることができる。そこには鐵齋の学問を根底とした多様な表現が試みられている。また、箱書にもその内容物や年紀の標記にとどまらず、画題の典拠や制作の動機・揮毫の情景など事細やかに示している。

書写した方法・種類の記載から、「酔」状況をあらわすものとして、
 酔書・酔題・酔寫などがあげられる。具体的な落款の例示からは、(資料番号)

14 酔中呵手而寫。 四十九歳

〈漁隱圖・清荒神清澄寺藏〉

2 …余快全大酔。實意有餘豪。燈下把筆作此圖。…鐵齋居士摩漸抄酔眼遂識。 三十五歳〈高子隱栖図・松雲仙境図・清荒神清澄寺藏〉

などに窺える。

また、若書き1〈層巒雨霽圖・清荒神清澄寺藏〉三十二歳の指頭画の箱書は再観箱である。(『鉄斎研究』三六一一)

(蓋表) 層巒雨霽圖

(蓋裏) 距今六十年前酔餘之筆。今日再観併題。八十有八叟 鉄齋。

これは画の揮毫から六十余年を経過し、往事を回想し感慨にみちて録したものである。一方で28〈福内鬼外圖〉(『鉄斎研究』五一—一五)は、賛と款記「富久者有智。遠仁者疎道。鐵道人酔墨。」ともに酔意を感じさせるものであり、27〈福自勤儉來圖〉(『鉄斎研究』五一—一〇)も画と賛に若干の乱れがうかがえる。二十年を経過したその再観箱には「酔餘爲此墨戲。距今殆二十餘年矣。鐵齋外史并識。」と、往事の揮毫コンディションが余程印象に残っていた観がある。

さらに箱書には、書写した月日を記す表記の例として

〈蓋裏〉 歳集癸亥大正十二年竹酔寫并題。祝採古堂老人喜寿。米寿

鐵齋外史。 〈蓬萊僊境圖・清荒神清澄寺藏〉『鉄斎研究』

七二—一〇〉

とあり、賛に寄せた文には、「自是蓬壺天不老、瓊桃花底酔長春。」とみえる。これは高田新助の喜寿を祝って描き、自ら好みの裂を一文字に表装して贈った一幅という。竹酔は陰暦五月十三日の「竹酔日」(大正

十二年は六月二十六日)のことであろう。芭蕉の美意識の現れる句、「降らずとも竹植うる日は蓑と笠」の竹植うる日を示したものであることを付す。このように鐵齋の賛や款記は、作品として書を書く、文字によって画を填補するというより、学問をもって充塞し、かつ彼の想いが充溢したという含みを持つのである。

さて、酔を表す落款は、資料1から三十歳代に9例、四十歳代も9例(箱書1)、五十九歳に1例、六十歳代が最も多く12例(箱書1)、七十歳代は箱書1例、八十歳代は4例(箱書1)確認できた。このように、表記としては現存作品数として少ない若書きに多い。六十歳代までは間々として「酔」落款が確認できる。七十歳代以降は極端に減っていると思われる。ただし、七十歳代以降の作品にも、画題や内容、典拠に関して「酔・酒」にまつわる頻度は高い。

鐵齋の酔落款は、三十代から六十代にかけて多く見受けられる。このことの一つには、壮年期に書画会の席、旅における宴席など、用意された席上揮毫が多かったこと。あるいは、南画における落款、文人の形を踏襲したものと思われる。酔を帯びて此の図を書き上げる先哲の表記に倣ったものであろう。つまり、三十代、六十代は、文人画(南画)の先哲に倣った款記の踏襲、たとえば蕪村筆〈倣王叔明山水図屏風・京都国立博物館藏〉款記「酔中偶摹得王叔明漫画法」にみられる、あたかも酔中の戯れという状況を仮に表記したにすぎない程度ではあるまいか。書き留めるべきは真意であること、学問がマダラに複雑に絡み合いながら彼の人生訓、人生観として充溢したのが鐵齋の賛であり、款記である。

おわりに

《酒望子図并酒徳頌》を手掛かりにこれまで考察を述べてきた。《酒徳頌》・《酒望子図并酒徳頌》・《酒望子図》・《酒望子図并蕪村俳文》は、軒先に「酒望子」を吊り下げた画と賛に寄せた「酒徳頌」がほぼ同様の形態である。これらは蕪村敬慕の現れの一つ、蕪村筆《杉酒屋画賛》の図様利用であり、鐵齋の制作を支える重要な根幹である。蕪村に因んだ用例の検証、相関関係については別に稿を草したい。なお、鐵齋と蕪村を繋ぐ先行研究に、藤田真一氏「蕪村・鉄斎写「桃華僊館図巻」——謝寅号の来歴——」（『会報42号』大阪俳文学研究会）、柏木知子氏「富岡鉄斎の蕪村——真摯に学び、共感の境地に」（『別冊太陽 与謝蕪村 画俳ふたつの道の達人』）などがあり、本稿でも参照とした。

再び《酒徳頌》・《酒望子図并酒徳頌》の書に着目すると、「四十七歳の頃から六十八歳までのおよそ二十年間は、金冬心の書風を母体としながらも、それまでに学んだ多くの先人たちの書風が、集約吸収されて既に鐵齋の血肉と化し、渾然と昇華作用を起しているように思われる。——中略——この時期を鐵齋書の成立期と呼ぶことが出来るであろう。」

（『鐵齋之書』野中吟雪著）

鐵齋の書風の推移からみれば、六十二歳の筆で鐵齋の書の成立期にあたる。彼独自の表現の飛躍、古稀前後からの書表現の多彩さと書境の深奥さがこの六十歳をすぎる頃から現れつつあるとみてよい。

敬慕する先賢蕪村。その筆跡に学ぶとともに関係資料の蒐集や考証に没頭し、事蹟の踏査など、蕪村への傾倒ぶりは遺された作品や筆録から知られる。そのような中で六十二歳の筆《酒徳頌》・《酒望子図并酒徳頌》が着手された。そしてこの画題は、十八年後の西宮賣酒隱士の懇望

に応えた《酒宿図并蕪村俳文》に結実する。無論、生活や環境、学問に至る充実ぶりとそれまでの蓄積があった。鐵齋にとっては本意を得た制作であつたろう。老いに向かつて益々学問にすぐれ、飛び抜けた叡智と徳行が混じり合う。まさに文徳の人鐵齋である。

※本稿作成にあたり、鉄斎美術館から賜ったご厚誼に謝意を申し上げます。また、調査・写真使用について鐵齋堂のご高配をいただきました。

資料1 「帶醉」「醉」を表す落款(年代別)

1	距今六十年前醉餘之筆。	慶応三年	三十二歳	『鉄斎研究』第三六一一〈層巒雨霽圖〉
2	鐵齋居士摩漸抄醉眼遂識。	明治三年	三十五歳	『鉄斎研究』第三四一四〈高子隱栖図・松雲仙境図〉
3	醉餘漫寫。	明治四年	三十六歳	『鉄斎研究』第三二一三〈秋山深趣圖〉
4	鐵齋醉人	明治四年	三十六歳	『鉄斎研究』第三三一二〈賣鉛翁圖〉
5	鐵齋鎮醉話中漫書	明治四年	三十六歳	『鉄斎研究』第三六一三〈重櫻房開拓境之詩書〉
6	鎮醉人。	明治五年	三十七歳	『鉄斎研究』第四九一一〈太平樓暮年酒宴圖〉
7	鐵齋醉人。	明治六年	三十八歳	『鉄斎研究』第四五十四〈陶淵明像〉
8	鐵齋醉人。	明治六年	三十八歳	『鉄斎研究』第六八一二〈寒江萬里圖〉
9	鐵齋醉人寫。		三十歳代	『鉄斎研究』五一一一二〈擁山抱水圖〉
10	鐵史醉寫并識	明治八年	四十歳	『鉄斎研究』第二四一二〈三津浜漁市圖〉
11	醉餘在剪燈而寫此一帖。	明治八年	四十歳	『鉄斎研究』第二七十四〈涉歷餘韻冊〉(跋)
12	雨窗醉寫。	明治八年	四十歳	『鉄斎研究』第六二一四〈大石良雄圖〉
13	醉餘漫寫。	明治九年	四十一歳	『鉄斎研究』第四六八八〈草花圖〉
14	醉中呵手而寫。	明治十七年	四十九歳	『鉄斎研究』第一一九〈漁隱圖〉
15	鐵史亭人鎮醉餘漫寫并題。		四十歳代	『鉄斎研究』第三二一一五〈青山幽隱圖〉
16	一日醉餘探得古紙。作此一巻。		四十歳代	『鉄斎研究』第四八一九〈田家勤務圖卷〉跋
17	(箱書)鐵齋醉題。		四十歳代	『鉄斎研究』第四八一〇〈槐鐵合作山水圖〉
18	鐵崖醉墨	明治十八年	五十歳	『大和文華館所蔵品・図版目録⑥』〈車海老図〉
19	鎮齋醉民	明治二十七年	五十九歳	『鉄斎研究』第五八一三〈禪苑雅會圖〉
20	醉餘寫并題。	明治二十九年	六十一歳	『鉄斎研究』第二一九〈還曆祝壽圖〉
21	醉眼朦朧之間。畫此圖。	明治三十年	六十二歳	『鉄斎研究』第三二一六〈鷄圖〉
22	醉眼朦朧之間畫此圖。	明治三十年	六十二歳	『鉄斎研究』第五〇一一二〈闔家全慶圖〉屏風
23	鐵齋醉民臨	明治三十年	六十二歳	『鉄斎研究』第四四一九〈酒徳頌〉
24	鐵齋帶醉而録	明治三十年	六十二歳	『酒望子図并酒徳頌』
25	帶醉而寫鐵齋外史。	明治三十一年	六十三歳	『鉄斎研究』第一〇一六〈佛說摩訶酒佛妙樂經〉
26	鎮齋醉筆。	明治三十一年	六十三歳	『鉄斎研究』第六七十六〈名家逸事談〉
27	(箱書)醉餘爲此墨戲。		六十歳代	『鉄斎研究』五一一一〇〈福自勤儉來圖〉
28	鐵道人醉墨。		六十歳代	『鉄斎研究』五一一一五〈福内鬼外圖〉
29	鐵齋帶醉而墨戲		六十歳代	『鉄斎研究』第四二一九〈醉李白像〉
30	鐵齋外史帶醉而寫		六十歳代	『鉄斎研究』第二三十五〈群僊祝壽圖〉
31	鎮齋醉墨		六十歳代	『最後の文人鉄斎―富士山から蓬莱山へ―』〈牛祭図〉
32	(箱書)醉餘寫此。鐵齋醉人。		七十歳代	『墨美 鉄斎の箱書Ⅱ』187号〈壽字オランダ写并〉
33	(箱書)醉恩露酒寫之。	大正四年	八十歳	『墨美 鉄斎の箱書Ⅱ』187号〈備具匣〉
34	醉餘遊戲爲開筆。	大正七年	八十三歳	『鉄斎研究』第一四一三五〈蓬莱仙境圖〉
35	醉餘遊戲爲開筆。	大正七年	八十三歳	『鉄斎研究』第四三一七〈蓬莱仙境圖〉扇面
36	醉餘信勿々臨一本。	大正十年	八十六歳	『鉄斎研究』第四一二一〈飯米・岳時淵邊圖〉

※32「(箱書)醉餘寫此。鐵齋醉人 七十歳代」『墨美 鉄斎の箱書Ⅱ』187号〈壽字オランダ写并〉は『清荒神清澄寺所蔵富岡鉄斎作品総目録 粉本・器玩・書簡編』に掲載「鶴龜繪付并鉢」である。

※33「(箱書)醉恩露酒寫之。大正四年 八十歳」『墨美 鉄斎の箱書Ⅱ』187号〈備具匣〉は『清荒神清澄寺所蔵富岡鉄斎作品総目録 粉本・器玩・書簡編』に掲載「松竹梅霽芝繪料紙文庫・文庫」である。

資料2 使用別分類

醉人

4	鐵齋醉人	明治四年	三十六歲	『鉄斎研究』三三三二二〈寶鈴翁圖〉
6	鏡醉人。	明治五年	三十七齋	『鉄斎研究』四九一一一〈太平樓暮年酒宴圖〉
7	鐵齋醉人。	明治六年	三十八歲	『鉄斎研究』四五十四四〈陶淵明像〉
8	鏡齋醉人。	明治六年	三十八歲	『斎研究』第六八一二二〈寒江萬里圖〉
9	鏡齋醉人寫。		三十歲代	『鉄斎研究』五一一二二〈擁山抱水圖〉
32	(箱書) 醉餘寫此。鐵齋醉人。		七十歲代	『鉄墨美 鉄斎の箱書Ⅱ』187号〈壽字オランダ写井〉

醉民

19	鏡齋醉民	明治二十七年	五十九歲	『鉄斎研究』五八一一三〈禮苑雅會圖〉
23	鐵齋醉民臨	明治三十年	六十二歲	『鉄斎研究』四四一九九〈酒德頌〉

醉墨

18	鐵崖醉墨	明治十八年	五十歲	『大和文華館所藏品・図版目録⑥』〈軍海老図〉
28	鐵道人醉墨。		六十歲代	『鉄斎研究』五一一一五〈福内鬼外圖〉
31	鏡齋醉墨		六十歲代	『最後の文人鉄斎―富士山から蓬萊山へ―』〈牛祭図〉

醉筆

26	鏡齋醉筆。	明治三十一年	六十三歲	『鉄斎研究』六七一六六〈名家逸事談〉
----	-------	--------	------	--------------------

醉題

17	(箱書) 鐵齋醉題。		四十歲代	『鉄斎研究』四八一一〇〈槐鐵合作山水圖〉
----	------------	--	------	----------------------

帶醉

24	鐵齋帶醉而録	明治三十年	六十二歲	〈酒望子図并酒德頌〉
25	帶醉而寫鐵齋外史。	明治三十一年	六十三歲	『鉄斎研究』一〇一六六〈佛說摩訶酒佛妙樂經〉
29	鐵齋帶醉而墨戲		六十歲代	『鉄斎研究』四二一九九〈醉李白像〉
30	鐵齋外史帶醉而寫		六十歲代	『鉄斎研究』一三二五五〈群僊祝壽圖〉

醉中

14	醉中呵手而寫。	明治十七年	四十九歲	『鉄斎研究』一一九九九〈漁隱圖〉
----	---------	-------	------	------------------

醉眼

2	鐵齋居士摩漸抄醉眼遂識。	明治三年	三十五歲	『鉄斎研究』三四一四四〈高子隱栖図・松雲仙境図〉
21	醉眼朦朧之間。畫此圖。	明治三十年	六十二歲	『鉄斎研究』二二一六六〈鷄圖〉
22	醉眼朦朧之間畫此圖。	明治三十年	六十二歲	『鉄斎研究』五〇一一二二〈圖家全慶圖〉屏風

醉寫

10	鐵史醉寫并識	明治八年	四十歲	『鉄斎研究』二四一二二〈三津浜漁市圖〉
12	雨窗醉寫。	明治八年	四十歲	『鉄斎研究』六二一四四〈大石良雄圖〉

醉餘(醉餘漫を含む)

1	距今六十年前醉餘之筆。	慶応三年	三十二歲	『鉄斎研究』三六一一三〈層巒雨霽圖〉
3	醉餘漫寫。	明治四年	三十六歲	『鉄斎研究』三三二二三〈秋山深趣圖〉
11	醉餘枯剪燈而寫此一帖。	明治八年	四十歲	『鉄斎研究』二七一一四〈涉歷餘韵冊〉(跋)
13	醉餘漫寫。	明治九年	四十一歲	『鉄斎研究』四六一八八〈草花圖〉
15	鐵史學人鍊醉餘漫寫并題。		四十歲代	『鉄斎研究』三三二一五〈青山幽隱圖〉
16	一日醉餘探得古紙。作此一卷。		四十歲代	『鉄斎研究』四八一九九〈田家勤務圖卷〉跋
20	醉餘寫并題。	明治二十九年	六十一歲	『鉄斎研究』二二一九九〈還曆祝壽圖〉
27	(箱書) 醉餘爲此墨戲。		六十歲代	『鉄斎研究』五一一一〇〈福自勤儉來圖〉
32	(箱書) 醉餘寫此。鐵齋醉人。		七十歲代	『墨美 鉄斎の箱書Ⅱ』187号〈壽字オランダ写井〉
34	醉餘遊戲爲開筆。	大正七年	八十三歲	『鉄斎研究』一四一三五五〈蓬萊仙境圖〉
35	醉餘遊戲爲開筆。	大正七年	八十三歲	『鉄斎研究』四三二一七七〈蓬萊仙境圖〉扇面
36	醉餘信匆匆臨一本。	大正十年	八十六歲	『鉄斎研究』四二二二二〈飯米・岳時淵浮圖〉

その他

5	鏡齋鍊醉話中漫書	明治四年	三十六歲	『鉄斎研究』三六一三三〈童僊房開拓境之詩書〉
33	(箱書) 醉恩露酒寫之。	大正四年	八十歲	『墨美 鉄斎の箱書Ⅱ』187号〈備具匣〉

資料3 使用印との検証

- 1 (箱書)距今六十年前醉餘之筆。 慶応三年 三十二歳 『鉄斎研究』第三六一一〈層巒雨霽圖〉
白文「鎮齋居士」(香山刻)【二四】
- 2 鐵齋居士摩漸抄醉眼遂識。 明治三年 三十五歳 『鉄斎研究』第三四一四〈松雲仙境図〉六曲一
双屏風
※白文「富岡百鍊」【未掲載】※朱文「鎮民」【未掲載】
- 3 醉餘漫寫。 明治四年 三十六歳 『鉄斎研究』第三一二三〈秋山深趣圖〉
朱文「硯田農」(板倉槐堂刻)
- 4 鐵齋醉人 明治四年 三十六歳 『鉄斎研究』第三三一二〈賣飴翁圖〉
白文「富岡百鍊」白文「德潤身」(山中信天翁刻)【九】
- 5 鐵齋鎮醉話中漫書 明治四年 三十六歳 『鉄斎研究』第三六一三〈童櫻房開拓境之詩書〉
※白文「氷壺」【未掲載】※白文「富岡百鍊」【未掲載】※朱文「字鎮四郎」【未掲載】
- 6 鎮醉人。 明治五年 三十七歳 『鉄斎研究』第四九一一〈太平樓暮年酒宴圖〉
※白文「富岡百鍊」(桑名鐵城刻)【二二七】白文「鎮齋居士」(香山刻)【二四】
- 7 鐵齋醉人。 明治六年 三十八歳 『鉄斎研究』第四五十四〈陶淵明像〉
白文「仁者壽」【未掲載】白文「鎮齋」(松浦武四郎刻)【三八】
- 8 鐵齋醉人。 明治六年 三十八歳 『鉄斎研究』第六八一二〈寒江萬里圖〉
白文「百鍊私印」(板倉槐堂刻)【五】朱文「字余曰鐵人」(板倉槐堂刻)【六】
- 9 鐵齋醉人寫。 三十歳代 『鉄斎研究』第五一一二〈擁山抱水圖〉
白文「鴨沂迂人」(金邨刻)【二八四】※白文「富岡百鍊」【未掲載】
- 10 鐵史醉寫并識 明治八年 四十歳 『鉄斎研究』第二四一二〈三津浜漁市圖〉
朱文「修靜」(板倉槐堂刻)【二二】白文「鐵史」(自刻)【二六三】白文「無如喫飯穿衣難」【未掲載】
- 11 醉餘桮燈而寫此一帖。 明治八年 四十歳 『鉄斎研究』第二七十四〈涉歷餘韵冊〉画帖(跋)
白文「鐵齋」【未掲載】※題字には白文「百鍊」(山本竹雲刻)【二三】白文「星記」併せて押印
- 12 雨窗醉寫。 明治八年 四十歳 『鉄斎研究』第六二一四〈大石良雄圖〉
朱文「修靜」(板倉槐堂刻)【二二】※白文「富岡百鍊」【未掲載】朱文「字鎮四郎」【未掲載】
- 13 醉餘漫寫。 明治九年 四十一歳 『鉄斎研究』第四六八八〈草花圖〉六曲屏風
白文「鐵史」(自刻)【二六三】
- 14 醉中呵手而寫。 明治十七年 四十九歳 『鉄斎研究』第一一九〈漁隱圖〉
朱文「國三」【未掲載】朱文「鎮道人」(牧縁刻)【一九三】※白文「蘿摩圃園」【未掲載】
なお、【一四】蘿摩圃【四五】蘿摩圃主がある
- 15 鐵史學人鎮醉餘漫寫并題。 四十歳代 『鉄斎研究』第三二一五〈青山幽隱圖〉
白文「鐵齋」白文「富岡百鍊」※朱文「字鎮四郎」【未掲載】
- 16 一日醉餘探得古紙。作此一卷。 四十歳代 『鉄斎研究』第四八一九〈田家勤務圖卷〉跋
朱文「毫生佛堂主人」印(自刻)【三〇五】
- 17 (箱書)鐵齋醉題。 四十歳代 『鉄斎研究』第四八一一〇〈槐鐵合作山水圖〉
※白・朱文「百鍊・無倦」方連印(桑名鐵城刻)【七六】明治二十七年刻(鮮明な写真なく確認不可)
- 18 鐵崖醉墨 明治十八年 五十歳 『大和文華館所藏品・図版目録⑥』〈車海老図〉
朱文「鎮道人」(牧縁刻)【一九三】
- 19 鎮齋醉民 明治二十七年 五十九歳 『鉄斎研究』第五八一二三〈禪苑雅會圖〉
朱文「吾將爲轡」(桑名鐵城刻)【二三四】※朱文「富岡百鍊」(桑名鐵城刻)【未掲載】で【九二】とは別印
- 20 醉餘寫并題。 明治二十九年 六十一歳 『鉄斎研究』第二一九〈還曆祝壽圖〉
※白文「鎮齋」【未掲載】白文「富岡百鍊」(陳曼壽刻)【一九二】朱文「千人萬人中式人半人知」(清人刻)【三一〇】
- 21 醉眼朦朧之間。畫此圖。 明治三十年 六十二歳 『鉄斎研究』第二二一六〈鷄圖〉
※朱文「貽笑」【未掲載】画面印白文「富岡百鍊」(桑名鐵城刻)【一二二】朱文「鐵塞翁」(桑名鐵城刻)【一二三】
- 22 醉眼朦朧之間畫此圖。 明治三十年 六十二歳 『鉄斎研究』第五〇一二二〈闔家全慶圖〉屏風
白文「富岡百鍊」(篠田芥津刻)【二五】朱文「鎮道人」(牧縁刻)【一九三】

- 23 鐵齋醉民臨 明治三十年 六十二歳 『鉄斎研究』第四四十九〈酒徳頌〉
 画面印白文「富岡百鍊」(桑名鐵城刻)【一一二】 朱文「鐵塞翁」(桑名鐵城刻)【一一三】
- 24 鐵齋帶醉而録 明治三十年 六十二歳 〈酒望于岡并酒徳頌〉
 白・朱文「百鍊・無倦」方連印(小沢荻庵刻)【二〇】
- 25 帶醉而寫鐵齋外史。 明治三十一年 六十三歳 『鉄斎研究』第一〇一六〈佛說摩訶酒佛妙樂經〉
 朱文「平安鏡更」(桑名鐵城刻)【一二二】
- 26 鐵齋醉筆。 明治三十一年 六十三歳 『鉄斎研究』第六七十六〈名家逸事談〉
 白・朱文「百鍊・無倦」方連印(小沢荻庵刻)【二〇】
- 27 (箱書) 醉餘爲此墨戲。 六十歳代 『鉄斎研究』第五一一〇〈福自動儉來圖〉※要検討作品
 ※朱文「鐵齋居士」【二四】(本紙) 朱文「鐵叟」(自刻)【二九九】 朱文「百鍊」(桑名鐵城刻)【七四】
- 28 鐵道人醉墨。 六十歳代 『鉄斎研究』第五一一五〈福内鬼外圖〉
 朱文「平安鏡更」(桑名鐵城刻)【一二二】
- 29 鐵齋帶醉而墨戲 六十歳代 『鉄斎研究』第四二一九〈醉李白像〉
 画面印朱文「鐵塞翁」(桑名鐵城刻)【一一三】 白文「富岡百鍊」(桑名鐵城刻)【一一二】
- 30 鐵齋外史帶醉而寫 六十歳代 『鉄斎研究』第一三十五〈群僊祝壽圖〉
 白文「富岡百鍊」(篠田芥津刻)【二五】 朱文「山背國人」(自刻)【三〇二】
- 31 鐵齋醉墨 六十歳代 『最後の文人鉄斎―富士山から蓬萊山へ』(牛祭図)
 ※朱文「鍊?□」【未掲載】
- 32 (箱書) 醉餘寫此。鐵齋醉人。 七十歳代 『墨美 鉄斎の箱書Ⅱ』187号〈壽字オランダ写并(鶴龜繪付并鉢)〉
 朱文「平安鏡更」(桑名鐵城刻)【一二二】
- 33 (箱書) 醉思露酒寫之。 大正四年 八十歳 『墨美 鉄斎の箱書Ⅱ』187号〈備具匣〉
 白文「鐵齋居士」(香山刻)【二四】
- 34 醉餘遊戲爲開筆。 大正七年 八十三歳 『鉄斎研究』第一四一三五〈蓬萊仙境圖〉
 朱文「富岡百鍊」(圓山大迂刻)【二六】
- 35 醉餘遊戲爲開筆。 大正七年 八十三歳 『鉄斎研究』第四三一一七〈蓬萊仙境圖〉扇面
 朱文「漁夫圖印」(清人刻)【二四〇】 朱文「鍊翁」【二五二】 鉄翁祖門用印
- 36 醉餘信々々臨一本。 大正十年 八十六歳 『鉄斎研究』第四一二一〈飯米・岳時淵淳圖〉
 ※白文「鍊槍齋」【未掲載】 朱文「鍊」(自刻)【二九二】

注 (印文・刻者などは『鉄斎研究』、『鉄斎研究』第七三号「富岡鉄斎用印大成」に拠り、【】に示す番号はその通し番号を使用した。)

注 ※については、なお検討を要したい。